

白い鳥

楠山正雄

青空文庫

むかし近江国の余呉湖という湖水に近い寂しい村に、伊香刀美というりょうしが住んでおりました。

ある晴れた春の朝でした。伊香刀美はいつものようにの支度をして、湖水の方へ下りて行こうとしました。その途中、山の上にさしかかりますと、今までからりと晴れ上がって明るかった青空が、ふと曇って、そこらが薄ぼんやりしてきました。「おや、雲が出たのか。」と思つて、あおむいて見ますと、ちようど伊香刀美の頭の上の空に、白い雲のようなものがぼつたり見

えて、それがだんだんとひろがって、大きくなつて、今にも頭の
上に落ちかかるほどになりました。

伊香刀美はふしぎに思つて、

「何だろう、雲にしてはおかしいなあ。」

と独り言をいいながら、じつと白いものを見つめていますと、

それは伊香刀美の頭の上をすうつと流れるように通りすぎて、だ

んだん下へ下へと、余呉湖の方へと下つて行きます。やがてき

らきらと、湖の上に輝きだした春の日をあびて、ふわりふわり落

ちて行く白いものの姿がはつきりと見えました。それは八羽の白

鳥が雪のように白い翼をそろえて、静かに舞い下りて行くの

でありました。伊香刀美はびっくりして、

「ほう、えらい白鳥だ。」

といいながら、我を忘れてけわしい坂道を夢中で駆け下り

て、白鳥を追い追ひ湖の方へ下りて行きました。やっと湖の

そばまで来ましたが、もう白鳥はどこへ行ったか姿は見えま

せんでした。伊香刀美はすこし拍子抜けがして、そこらをぼん

やり見回しました。すると水晶を溶かしたように澄みきった

湖水の上に、いつどこから来たか、八人の少女がさも楽しそうに

泳いで遊んでいました。

少女たちは世の中にもこわいことのないような、罪のない

様子で、きれいな肌を水の中にひたしていました。伊香刀美は

「あッ。」といったなり、見とれてそこに立っていました。する

とどこからともなくいい香りが、すうすうと鼻の先へ流れてきま
した。そして静かな松風の音にまじって、さらさらと薄い絹の
すれ合うような音が、耳のはたで聞こえました。

気が付いて伊香刀美が振り返ってみますと、すぐうしろの松の
木の枝に、ついで見たこともないような、美しい真っ白な着物が
掛けてありました。伊香刀美はふしぎに思つて、そばへ寄つてみ
ますと、美しい着物はみんなで八枚あつて、それは鳥の翼をひろ
げたようでもあり、長い着物のすそをひいたようでもありました。
それがかすかな風に吹かれては、音を立てたり、香りを送つたり
しているのです。

伊香刀美はその着物がほしくなりました。

「これはめずらしいものだ。きつとさつきとりの白い鳥たちがぬいで
 行つたものに違ちがいない。するとあの八人にんの少女おとめたちは天女てんによで、
 これこそ昔むかしからいう天あまの羽衣はごろもというものに違ちがいない。」
 こうひとり言ひとごとをつぶやきながら、そつと羽衣はごろもを一枚まいと取り下ろし
 て、うちへ持もつて歸かえつて、宝たからにしようと思おもいました。でも水みずの中
 に居いる少女おとめたちがどうするか、様子ようすを見届みとどけて行いきたいと思おもつて、
 羽衣はごろもをそつとかかえたまま、木の陰かげにかくれて見みていました。
 八人にんの少女おとめたちはややしばらく水みずの中で、のびのびとさも気持きも
 ちよさそうに、おさかなのように泳およぐ形かたちをしたり、小鳥こどりのように
 舞まう形かたちをしたりして、余念よねんなく遊あそび戯たわむれていましたが、やがて一ひ
 人上とりあがり、二人上ふたりあがり、松まつの木の下まで来くると、てんでんに羽はごろも

衣もを取り下ろしては、体からだにまといました。そして一人一人、ぱあつと羽衣はごろもをひろげては、舞まい上がっていききました。

とうとう七人にんまで、少女おとめたちはみんな白鳥はくちょうになつて空の上そらに舞まい上がりましたが、いちばんおしまいに上あがって来た八人にんめの少女おとめが、見みると自分の羽衣はごろもは影かげも形かたちも見みえません。松風まつかぜばかりがさびしそうな音おとを立てていました。少女おとめはその時とき、

「まあ、わたしの羽衣はごろもが。」

といったなり、あわててそこらを探さがしはじめました。もうその時ときには、仲間なかまの少女おとめたちは、七人にんとも空の上そらに舞まい上がって、見みる間まに、ずんずん、ずんずん、遠とくなくなつていきました。

「まあ、どうしましょう。羽衣はごろもがなくなつては、天てんへは帰かえられ

ない。」

と少女おとめはくらい目をして、うらめしそうに空そらを見上げました。
 青々あおあおと晴れた大空おおぞらの上に、ぽつん、ぽつんと、白い点々てんてんの
 ように見えていた、仲間なかまの少女たちの姿すがたも、いつの間まにか、その
 点々てんてんすら見えないほどの遠くとおにへだたつて、間あいだには春はるの霞かすみが、
 いくえにもいくえにも立ち込こめていました。

「天てんにも帰かえられない。地ちにも住すめない。わたしはどうしたらいい
 のだろう。」

と、羽衣はごろもをなくした少女おとめは、足あしずりをして嘆なげいていました。
 さつきからその様子ようすを陰かげでながめていた伊香刀美いかとみは、さすがに気き
 の毒どくになつて、のこのこはい出だして来きて、

「あなたの羽衣はごろもはここにありませんよ。」

といいました。

だしぬけに声こえをかけられて、少女おとめはびつくりしました。それから人間にんげんの姿すがたを見ると、二度どびつくりして、あわてて駆け出だそうとしました。しかしふと伊香刀美いかとみの小わきにかかえている羽衣はごろもを見ると、急にきゆう生き返かえったような笑顔えがおになつて、

「まあ、うれしい。よく返かえして下くださいました。ありがとうございます。ます。」

といいながら、手を出だして羽衣はごろもをうけ取とろうとしました。けれど伊香刀美いかとみはふと羽衣はごろもをかかえていた手を、うしろに引ひつ込こめてしまいました。

「お気の毒ですが、これは返すわけにはいきません。これはわたしの大事な宝です。」

といいました。

いったん気の毒になって、羽衣を返そうと思つた伊香刀美は、急にまたこのきれいな少女が好きになって、このまま別れてしまふのが惜しくなつたのでした。

「まあ、そんなことをおつしやらずに、返して下さい。それが無いと、わたしは天へ帰ることができません。」

と少女はいつて、はらはらと涙をながしました。

「でもわたしはあなたを天へ帰したくないのです。それよりもわたしの所へおいでなさい。いつしよに楽しく暮らしましょう。」

と伊香刀美はいいました。そしてずんずん羽衣をかかえたまま向こうへ歩いていきました。少女はしかたがないので、悲しそうな顔をして、後からついていきました。

少女は羽衣にひかれて、とうとう伊香刀美のうちまで行きました。そして伊香刀美といっしょに、そのおかあさんのそばで暮らすことになりました。でも始終どうかして天に帰りたいと思つて、折があつたら羽衣を取り返して、逃げよう逃げようしました。伊香刀美も少女の心を知っているので、羽衣をどこかへしまつたまま、少女の目にはふれさせませんでした。少女は毎日のように空をながめては、人しれず悲しそうなため息をついていました。

そうこうするうちに三年たちました。

ある日伊香刀美は、いつものように朝早くのように出かけました。少女は伊香刀美のおかあさんといろいろ話をしていて、ついでに、ふとおかあさんが、

「まあ、お前がここへ来なすつてからもう三年になるよ。月日のたつのは早いものだね。」

といいました。少女はそつとため息をつきながら、

「ほんとうに早うございますこと。」

といいました。

「お前、^{まえ}今でも^{いま}天へ^{てん}帰りた^{かえ}いだろうね。」

「ええ、それははじめのうちはずいぶん^{かえ}帰りとうございしましたが、
今^{いま}では^{にんげん}人間の^く暮らしに^な慣れて、この^{せかい}世界が^す好きになりました。」

と^{こた}答えながら、^{なにげ}何気なく、

「そういえば、おかあさん、あの^{とき}時の^{はごろも}羽衣はどうなつたでしょ
うね。あれなり伊^い香^か刀^と美^みさんにおあずけしたままになつておりま
すが、^{なが}長い^{あいだ}間にいたみはしないかと、^き気にかかります。おかあさ
ん、あの、ちよいとでよろしゅうございますから、^み見せて^{くだ}下さい
ませんか。お願^{ねが}いです。」

といいました。

おかあさんは伊香刀美いかとみから、どんなことがあつても少女おとめに羽衣はごろもを見せみてはならないと、かたくいいつけられていましたから、強つよく首くびを振ふるつて、

「それはいけませんよ。」

といました。

「なぜ、いけないのでしょうか。」

と少女おとめは子供こどもらしい目をくりくりとさせて、さもふしぎそうにたずねました。

「だって羽衣はごろもを見みせると、それを着きて、また天てんへ帰かえつてしまふでしよう。」

「まあ、わたくし、人間にんげんの世界せかいがすっかり好きすになつたと申し

上げたではございませんか。おかあさん、お願いです、ほんの一目見ればいいのですから。」

と、少女はしきりとおかあさんに甘えるように頼んでいました。そのかわいらしい様子を見ていると、おかあさんは、何でもそういうとおりにしてやらなければならぬような気がしてきました。

「ではほんのちよいとですよ、伊香刀美にはないしよだね。」

とおかあさんはいいいながら、戸棚の奥にしまつてある箱を出しました。少女は胸をどきつかせながらのぞき込みますと、おかあさんはそつと箱のふたをあけました。中からはぷんといいい香りがたつて、羽衣はそつくり元のままで、きれいにたたんで入れてありました。

「まあ、そっくりしておりますのね。」

と少女おとめは目を輝かがやかしながら見みていましたが、

「でも、もしどこかいたんでいやしないかしら。」

というなり、箱はこの中の羽衣はごろもを手とに取りました。そしておかあ

さんが「おや。」と止とめるひまもないうちに、手てばやく羽衣はごろもを

着きると、そのまますうつと上まへ舞あい上がりました。

「ああ、あれあれ。」

と、おかあさんは両手りょうてをひろげてつかまえようと思いました。

その間まに少女おとめの姿すがたは、もう高たかく高たかく空そらの上あへ上あがって行って、や

がて見みえなくなりました。

帰かえって来きて伊香刀美いかとみはどんなにがっかりしたでしょう。三年ねんま

前えみずうみに湖のそばで少女おとめがしたように、足あしずりをしてくやしがりま
 したが、かわいらしい白い鳥とりすがたの姿は、果はてしれない大空おおぞらのどこ
 かにかくれてしまつて、天てんと地ちの間あいだには、いくえにもいくえにも、
 深ふかい霞かすみが立たち込こめたまま春はるの日は暮くれていきました。

青空文庫情報

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年4月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年9月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

白い鳥

楠山正雄

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>